

---

# 僕のバイトは探偵です。

山田詩織子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕のバイトは探偵です。

### 【Nコード】

N0822Z

### 【作者名】

山田詩織子

### 【あらすじ】

探偵のバイトをしている高校生、カルネ。

彼には特別強くもなければ特殊な能力なんてない。

ほんの少しだけ壊れているだけ。

オッドアイの瞳をもつ小学生、シアン。

彼女はバツクにナイフを忍ばせ、色違いの瞳で世界を睨み続ける。

平凡でもなければ非凡でもない二人。

犬猫を探したり、落とし物を拾ったり、事件に巻き込まれたり。

そんな話だ。

自ブログ、SSで連載していた小説に加筆、修正したものです。

日曜の朝はいい天気だった。

雨戸を開け、4月の暖かい風を感じながら布団を干そうかと考える。

「たまには干すか」

せつかくの快晴なんだし。

ベランダなんて贅沢なものはないので、落下防止用の柵に布団を引っ掛ける。

ついでに空気の入れ換えもした。

毎日換気をしたほうがいらしいのだが、窓を開けっ放しにして学校には怖くて行けない。

いくら僕だってそこまで不用心じゃないのだ。

この部屋にわざわざ盗んでいくようなものはないんだけど。

「んっ」

軽く伸びをする。

いつもより遅く起きて体調も上々。朝飯も上手くできた。

それなりに気分がいい。

こんな日は家に閉じ籠っているより外で何かをしたほうがいい気がする。

だから、僕の姉さんが勤めている事務所に行こうと思いついた。

だからだと身支度をしていく。

寝癖と格闘している時、強めに玄関のドアが叩かれた。

「あなた！そこにいるのは分かっているのよ！」

なんか朝から昼ドラが始まっていた。

僕が一体何をしたというんだ。

どうでもいいけどドラマのドロドロ展開は苦手。

「あんちゃんよお金いい加減返してくれねーか？」

あ、ネタ変えてきた。

そろそろ反応してあげないとかわいそうなので、ドアを開ける。

「おはよう」

「おは…あいたっ！」

そこに立っていた少女がアパートのドアに額をぶつけた。

ドアも若干いやな軋みをあげる。

そこにいたらぶつかって分かっていなかったのだろうか、この子。

「それと浮気と借金とりごっこは止めようね」

「ご近所さんのいい噂になるから。」

「え、ドラマでよくやっているぞ？」

額を押さえながらきよとんとした顔をする。

昼ドラ見すぎだよ。教育に悪いよ。

「それよりどうしたの？君が僕のところにくるなんて珍しい」

シアンちゃんが僕を見上げ、その色違いの瞳が僕の姿を映した。

「大した理由はない。両親は仕事だし、兄と二人つきりは身の危険を感じてな。あと暇だから」

「マゼンタちゃんとアンジュちゃんはいないの？」

「マゼンタは旅行、アンジュはサッカーの練習試合だ」

納得した。

普段遊んでいる友達も用事でいない。

だが家にいれば兄と二人つきりになる。

だからここへ避難しに来たわけだ。

というか、高校生と二人つきりになるよりも嫌なことなんだな…。

彼女のお兄さんがとんでもないシスコン君なのだが、これについてはまたいつか。

正直なところ、彼は避けたいんだけどなあ…。変態だし。

「で、にく」

「ん？」

にくと呼ぶなにくと。

おおかた由来はカルネ「肉」にくって理由なんだろう。

「今日はどこか行く予定だったのか？」

「うん。事務所に」

「じゃあ私もついていく」

「いいけど、今日も多分暇だよ？」

「それでもいい」

シアンちゃんは仕事の邪魔をしたりしないので、事務所の人達に可愛がられている。

彼女も瞳の色のことで拒絶されないので気に入っているらしい。探偵事務所に入り浸る高校生と小学生ってどうなんだろう。コナン君はあれ住んでるし。

「ちょっと待ってて。荷物取ってくるから」  
「うん」

端から見たらなんて思われるんだろうな、なんて思いながら部屋の奥のバックを取りに行った。

## 黒猫 + 僕 + 探偵 II 事件 2

僕の住むアパートから三十分ほど歩くと古めのビルが見えてくる。その二階が探偵事務所だ。朝だというのに薄暗い階段を上がり、これまた古ぼけたドアを開けた。

「おはようございます」

「おはよう」

三人の視線が僕らに集まった。

「やあ、おはよう」

この四十代前半ぐらいの男性がこちらの所長。本当の名前は知らないので所長としか呼びようがない。

「わーいカルネ君だ！」

彼女はポワソン・ペンサーレ。

ブラコン気味の僕の姉。もちろん血は繋がっている。

「おはよう二人とも」

こちらが姉さんの同僚、ライスさん。

受付・カウンセリング担当のさばさばしたお姉さんだ。

あと一人は…出掛けているのか。

「お久しぶりシアンちゃん。ここに来るなんて珍しいわね」

姉さんが少しだけ不思議そうな顔をした。

シアンちゃんが最後にここに顔を出したのは一ヶ月ぐらい前だもんな。

「暇だったんでな」

「溜まり場かここは…」

ライスさんが小さくツツコミを入れた。

まあ、分からんでもない。

所長が側に置いてあったファイルから紙を引き出す。

「ちょうど良いところに来たね。仕事があるんだ」

「仕事…入ったんですか？」

「世界でもおわるんじゃないか…」

「それはひどくない!？」

所長がショックを受けていた。

だって、この事務所最高二週間も仕事入らなかったことあるし。

仕事に関して姉さん達より遥かに常識人のライスさんが頭を抱えていたのを覚えている。

姉さんは『なければいいじゃない』とか言っちゃう人だからな。さぞかしライスさんの頭痛はひどかったことだろう。

「猫探しをして貰いたいんだ」

「猫ですか」

「なるほど」

手渡された写真には赤い首輪をつけた黒猫が写っていた。

名前はヤマトか。猫は名前呼んでも来ないけど一応覚えておく。

見つかった時に連絡できるよう飼い主の電話番号を携帯に登録した。

「ポワソン君達はその後浮気調査が入っているからできないんだ」

「えっ、そんなに仕事入りましたか」

「そう。わたしもびっくりした」

「ライス君まで何を言っているんだい!？」

明日は槍が降るかもしれない。

### 黒猫 + 僕 + 探偵 II 事件 3

猫探しについては詳しくは省こう。

猫がいきなりスポットを順番に見回って、見つけて、追いかけた。そして捕まえて引っ搔かれた。

シャーと全身全霊を持って嫌がられてしまった。地味にへこんだ。

今はシアンちゃんの腕の中で大人しく抱かれている。

僕が抱っこしようとする、ヤマトはやはり嫌がって暴れるのでシアンちゃんに彼（ヤマトは男の子）の世話を頼んだ。

…なんなんだろう。そんなに僕がいやなのか。

それともいつかヤマトがデレしてくれるとか、そういうの期待しているのかな。

いや、それはないな。

猫のツンデレってなんだよ。どんな電波受信したんだよ僕。

「私も猫飼いたかったな」

「コシコシとヤマトの喉を撫でながらシアンちゃんが呟いた。

「飼えないの？」

「お母さんが毛のアレルギー持ちだからな」

「ああ…じゃあ動物全般は無理なんだ」

「でもその他は良いって言われた」

「例えば？」

「コブラ」

「まさかの毒蛇!？」

ともあれヤマトを無事発見確保したので、依頼主に電話をかける。  
ぶるる、と機械音を聞きながら待つ。

セブンコールで切られた。

ガチャンって。…ん、ガチャン？

「…あれ？」

意図的に切られた、みたいだな。

もう一度掛け直して見ると、今度は留守番電話に繋がった。

おかしい。

「どうした？」

「なんというか…当たって欲しくない予感がビンビンと」

シアンちゃんと目があう。

僕は肩を一度竦めて見せた。

「事件発生かも」

「どうするんだ、にく。一度事務所に戻るのか」

「いいや 現在進行形で巻き込まれているかもしれない。だって早く助けにいかなくちゃ」

「分かった。場所は？」

「近い。走れば五分ぐらい」

今いる地区と、依頼人のマンションの最短ルートを考える。

下手に近道はしないほうがいいか。急がば回れって言うしな。

シアンちゃんに付いてくるように言って走り出す。

「あ、ヤマト」

シアンちゃんの腕からすり抜けてヤマトが僕らの先頭を走り出す。

まるで飼い主の危機を察して、僕たちを急き立てるみたいに。

- - -

高級マンションの四階。

依頼人は女性。

だからなのか、警備がそれなりに頑丈そうだ。

エレベーターを使い、再びヤマトを抱っこしたシアンちゃんと共に  
目的の部屋に行く。

名前は…よし、合ってるな。

深呼吸してチャイムを押す。

中から見ているという合図のランプがついたのでインターホンに向

かって喋る。

「えっと、こんにちは」

顔の見えない相手に話すのは苦手だ。

「電話したのですが、留守番電話だったので直接来てしまいました」  
違和感。

「…依頼されたヤマトくんを見つけたので、……」

言葉を止めた。

だって変じゃないか。

ここまで相手は一言も発していない。

普通、何か言うはずだろう？

どれだけ非常識な人でも、「あーはいはい」ぐらいは言いそうなものなのに。

喋れないとかは聞いていない。

いや、所長によれば明るい女性だと聞いたのだが。

その『明るい女性』がいつまでも『黙りこくる』ものなのか？

先ほどの電話の事もあって警戒が高まる。

「あの、あなた……何をしていますか？」

『……………』

ザアアとノイズのみがインターホンから聞こえるだけ。

「……………」

「……………」

ニヤア、と焦れるようにヤマトが鳴いた。

瞬間、インターホンの向こう側が騒がしくなり、玄関へ全力で走ってくるような物音がした。

本能がこれはヤバイと警告した。

「行くよ！」

「お、おう！？」

エレベーターなんて悠長に使ってられない。

非常階段を使いシアンちゃんを先に行かせて掛け降りた。

上から見ている可能性もあるのでしばらく隠れた後に、僕たちはマンションの敷地から抜け出した。

「何がなんだか……。にく、どうしたんだ？」

近くの公園のベンチ。

息を整えながらシアンちゃんが聞いてくる。

「依頼人じゃない誰かが、いたっぽいんだ」

確証はない。

確定できない。

もしかしたら依頼人さんがあんな人なのかもしれないとか、色々あるけど。

だけど、直感的に思ったのだ。

違う。なにか、違う。

「ヤマトの声聴いたとたんに反応したのも気にかかるけどね……」

あれはただ単に条件反射とか、きっかけとか、そんなものかも。

まさか誰かさんがヤマトを狙っているとか、そんな展開ないだろう。

しかし、顔をばっちり見られたわけだから下手に動かないほうがいいかもな。

どうして僕ばかりハンデが溜まっていくのか。

「……む」

「シアンちゃん？」

唸るように声を洩らし、公園の出入口を見るシアンちゃん。  
つられて見ると、

「……………わお」

どう見てもガラの悪いお兄さん達がこっちに向かって来ていた。

…もうちよい、遠くまでいくべきだったな。

僕たちから二メートルほどの距離を置いてお兄さん達は止まった。

「…ベンチに座りたいんですか？ならどうぞ」

「ベンチになんか用はない。その猫を寄越せ」

まさかのヤマト狙いかよ。

「依頼人以外には渡せない決まりになっていまして。すみません」

真っ赤な嘘だ。真っ赤な誓いではない。嘘。  
決まりとかさっぱり知らないし、分からない。

せいぜい他人の敷地に入らないとかそういうのぐらいだ。

「んだよガキの癖に偉ぶって。何様のつもりだ？あ？」

「どうやら痛い思いしないと分からないみたいだな？」

あれれーなんか選択肢ミスったよー。

しょうがない、シアンちゃんとヤマトだけでも逃がすか。

「にく、ヤマトを」

「え？」

ぽんつとヤマトを渡された。

ちよつと引っ搔かれた。どこまで僕が嫌いなんだよお前。

シアンちゃんはショルダーバッグから鞘付きのフルーツナイフを取り出す。

そして、鞘をはらって抜き身の刃が現れる。

そのままびたりとお兄さん達にナイフを向けた。

「な……」

お兄さん達がどよめく。

当たり前だ、銃刀法違反してるんだから。じゃなくて。

「そつちが暴力で来るなら、私も武力で行く」

「シアンちゃん……」

彼女は　いつもこうなのだ。  
逃げない。  
退かない。  
強くあり続けようとする。

「シアンちゃん、危ない。逃げよう」  
「追ってくるぞ」  
「追うなら逃げ続けよう」  
「……ヘタレ」

うっ。  
まあそうなんだけどさ。

お兄さん達が、ようやく小学生にナイフを向けられたショックから立ち直ってしまったらしい。  
こちらがわに凶器があるので下手に行動できないみたいだ。

「……けっ」

お兄さん達のリーダーっぽい人が唾をはいた。汚ない。

「猫を寄越せばそれでいいんだよ、グダグダ言いやがって」  
「何故、猫を狙うんですか。関係ありませんよね、あなた達に」  
「頼まれてんだよ。無駄話はいい、怪我なんかしたくないならさっさとしろ」

「嫌です。なら、その人が来ればいいじゃないですか」  
「はあ？ふざけんじゃねーぞ、そっちに刃物があるからって調子の人な」

調子のねません。  
ヤマトの爪が地味に痛い。

「ったく、なんたためーは。気持ち悪い」

リーダーさんはシアンちゃんを見ながら、吐き捨てた。  
彼女は動揺したように切っ先を震わす。

「なんだよその目、色違いで。呪われてんのか？」

余裕が出てきたのか、後ろのお兄さん達もせせら笑う。

「親も大変だなあ、こんな変な子供生んで。ははっ、よく生きていこうと思え」

「謝れよ」

僕にしては、ずいぶんと低い声だ。

「謝れ。訂正しろ。彼女は気持ち悪くない」

「……は？ふざけてんのか？」

「１ミクロンもふざけていない。いいから謝れよ」

「こく…」

お兄さん達は顔を真っ赤に指をならした。

ああ、マズイかな。

反省も後悔はしていない。

シアンちゃんをなんとか逃せればいいや。自分のことなんてどうでもいい。

「謝るのはそっちだろ？散々コケにしゃがっ…へぶっ」

突然リーダーさんが前のめりに倒れ込んだ。  
ざわ…ざわ…とお兄さん達が驚く。

「そんな年になってまだ女の子いじめか 将来が不安だ」  
「てめっ、よくも！」

リーダーさんを後ろから蹴り倒した男にお兄さんの一人が掴みかかる。

綺麗な一本背負いで放り投げた。

「きりもみ回転式土下座ぐらいはしてもらわないとな」

相変わらずのだるそうな顔。

お兄さん達の攻撃を避け、蹴りを叩き込みながら僕らの前に来る。  
彼の後ろは死屍累々。

「……なんでここにいるんだよ」  
「たまたまだ」

探偵事務所の一員。

僕のちよつと苦手な奴。

シュヴァインだった。

「で、なんだ？なにが起こった？」

シュヴァインは振り向いて倒れ伏しているお兄さん達を眺める。

十人ほど相手にしておきながら息は全く切れていない。

体育の持久走で死にかけられる僕よりはるかに体力があるんだろうな。

「えつとね」

簡単に説明する。

ふんふんと納得したようにシュヴァインは頷いた。

「なるほど、つまりお前はロリコンなんだな」

「…何を聞いてたんだよお前！」

そんなこと一言たりとも言っていない。

シアンちゃんが呆れたようにため息をついた。

彼女はシュヴァインと初対面の時、さんざんこいつのペースに振り回されていたようだ。

ようだ、というのは僕はその時気絶していたから。死にかけていたともいう。

「しかし……その猫が狙われてるのか」

「うん、このヤマトがね」

「どうすればいいんだ？」

シアンちゃんが困ったように首を傾げる。

つられてツイントールが小さく揺れた。

女の子らしい仕草で可愛い。

「まずそのナイフをしまえ」

「あ、忘れてた」

「…忘れるものなの？」

それは怖いな。

「埒があかねーし、ちょっと詳しく聞くか」

「え？」

スタスタとお兄さん達の所に歩いていくシュヴァイン。僕、シアンちゃん、ヤマトでなんだなんだと見守る。

彼は屈んで、丁度顔を上げかけたリーダーさんの顔を掴みもう一度地面とごっつんこさせた。

痛そう。

「……」そのまま無言で腰に手をやり、すらりと細身のナイフを取り出した。

そう、こいつもナイフをもっているのだ。

一本のみのシアンちゃんと違い、おそらくは何十本も。

シアンちゃんとシュヴァインで銃刀法違反コンビと名付けてもいい気がする。

しかし半年前、その違反コンビに助けられたのだから強くは言えない。

「で、だ。お嬢ちゃんへの悪口をまず謝ろっか」

「な…なんでそんなこと」

ナイフが閃いて、リーダーさんの顔のすぐ横に突き刺さった。いっさいがっさい容赦ない。

「ま、私情なんだけどな。俺は人を見た目で判断する奴が嫌いなんだ」

「……そうなのか？」

「……そうでもないよ」

「そこ黙ってる」

聞こえてたか。

「人の外見に触れるのはあまりよろしくないんだが、知らないか？」

「知らないし興味も」

「

「そうか、残念だ」

シユヴァインは地面に突き刺さったナイフを抜いた。

「お嬢ちゃんがいるから過激なことはできないが……ちょっと、外見変えてみるか？」

恐ろしい悪魔の言葉だった。

「皮膚を少しずつ剥ぐとか、鼻とか耳削ぐとか。安心しろよ、死にはしない」

その間僕はシアンちゃんの耳をすっかりガードしていた。

教育に悪いだろうが馬鹿。

昼からこんなことするような非常識なやつじゃないからただの脅しだろう。

なんかシアンちゃんが照れていた。

「嘘だろオイ……そんなことしたことあんのかよ」

「本当だ。あと悪いが、今あげたこと」

シユヴァインはふと表情に陰りをみせた。

「何度か経験、あるからな」

どちらなのは、知らない。

それは詮索しないほうがいいのだろう。

「やられたくないならお嬢ちゃんに今すぐ謝って、あと誰に頼まれたのか言え」

「ひいっ……す、すみませんでしたー！」

土下座のような形で叫んだ。

一時的にシアンちゃんの耳を解放する。

「あ、ああ……」

ものすごくドン引きしていた。無理もない。

「次のステージに移ろうか。指図したのは誰だ？」

「しらねえー！」

「ふーん」

「待て！これには長い話があつて！」

「長い話嫌いなんだよ。要点だけまとめろ」

サドっぷりがすごい。

…御愁傷様だ。同情はしないが。

-----

パトロールしていた警察にお兄さん達を任せて、公園から移動している途中。

「奇妙な話だな。普通、見も聞きもしないやつ言うことなんて聞かか？」

もつともな、小学生らしい意見だった。

「大金がちらつかれていればああいうゴロツキは簡単に動くんだよ」  
シユヴァインが手をヒラヒラさせながら続ける。

「しかも、『抵抗すればなにしてもいい』って言ってたそうだからな」

ポコポコにできるし礼金は入るしで、ストレス解消と小遣い稼ぎにはもってこいだ。

「失敗しても身バレしないように、他の人を使ったんだね…」

「地位のある人間か、表沙汰になると困る人間だろう」  
指図した人はなんとなく予想がついている。

あの時、インターホンに出た人。  
やっぱり僕の顔を見られたんだと思う。

その『黒猫を抱えている男（僕）』を探しだしてヤマトを奪い取らなくてはいけなかった理由。

ヤマトは狙われている。  
かなり強引な方法で手にいれなくてはいけないぐらいに。

何回目かの、疑問。

なんでだ。

「俺は先輩と仕事いかなくちやいけないから離脱だ」

「あ、うん」

「いいか、危険な目にあつたらさっさと逃げるよ」  
釘を刺された。

シユヴァインを見送って、無謀にもまたマンションに行こうとなる。  
また刺客を送ってくるのだろうか。そしたら…もう事務所に帰ろう。  
僕はともかく、シアンちゃんが危ない。

パトカーとすれ違った。

パトカーとすれ違った。

パトカーとすれ違った。

「……あれ？」

一度にずいぶんパトカー走るな。

「にく、あのパトカー…」

ナーと同意するようにヤマトが鳴いた。

パトカーの向かう先にはさっきのマンション。

嫌な予感しかしなかった。

嫌な予感ほどあたるものだ、とは誰が言ったのか。確かにそうだと思う。

二年前、家にさしかかる道を歩いたとき。

三年前、部室を開けようとしたとき。

酷く嫌な予感がして 当たった。当たってしまった。

忍び込むようにして入ったマンションの、四階。

「……………」

「……………」

シアンちゃんと僕は声が出なかった。

担架に乗せられ運ばれた誰か（・・・）がエレベーターに吸い込まれていくのを見送った。

「…もしかして、さっき来た時点で遅かったのかな」

「……………」

依頼人さんじゃないといいんだけど、と思ったけどすっかりと彼女の、さつきインターホンを押したばかりの部屋が開いていて。

しかも検察官とか警察が出入りしている。

これでもかとはかりに現実を見せつけてくれたもんだから、微かな希望は露と消えた。

「……………」

気づくとシアンちゃんが僕の服を掴んでいた。

ヤマトは空気を読んで酷く大人しい。

声をかけるべきか迷った。

「なにしてんだ、お前ら」

僕らのほうへ刑事の一人が寄ってくる。

泣く子も黙る鋭利な表情。

海賊みたいな眼帯。

「…アスマルトさん」

半年前に色々とお世話になった人だった。そしてお説教を一時間もしてくれた若干迷惑な人。

シアンちゃんの友達、マゼンタちゃんのお兄さんだ。

年は離れているけど血はちゃんと繋がっているとかなんとか。

「シアンも。ここは遊び場じゃないんだからな」

遊び場にもしたくねーよ、こんな高級マンション。

「そのこの部屋の人に用がありました」

「……何のだ？」

「猫を見つけたので、送り返しにきたんですが…今大丈夫ですか？  
我ながら白々しい質問だと思う。

答えなんか分かっている。

「…それはどうしても、か？」

「頼まれている以上はどうしても。一分でもいいので」

アスマルトさんは僕の耳元で囁く。

それがシアンちゃんに直接聞かせたくないからだということには後で気付いた。

「彼女は 死んだ」

死んだ。

そうか、死んでしまったのか。

やっぱり、僕のことながら予想していた通りにあっさりとした感想だった。

「そうでしたか」

「もうちょっとその猫を預かってくれないか？こちらもバタバタしてて手が回らない」

「でも」

シアンちゃんがアスマルトさんを見上げて声をあげた。

「さっき、ヤマトを狙って変な奴等に絡まれたんだ」

「ヤマト？」

「その猫の名前です。すつじく凶暴です」  
「ハーツと唸られた。ほら凶暴。」

「マジか」

アスマルトさんが無謀にもヤマトに手を伸ばす。  
引っ掻かれるかと思っただが素直に撫でさせた。  
あれれ。

試しに僕が手を伸ばすと引っ掻かれた。  
あれれ。

なんだこの不平等な扱いは。

「猫が狙われている…ということとは？」

「私たちにも分からない。ヤマトの脳内になにかインプットされて  
いるとか」

「だったらあんなゴロツキ使わないでしょ」

「怪我とかはしなかったのか、お前ら」

「大丈夫だ」

「通りすがりの月光仮面が助けてくれたんですよ」

流石に知り合いがその人たちをボコボコにしましたなんて言えな  
い。

下手したらシュヴァインが捕まりそうだ。

「そうか。悪いな…何かしら危害を与えられないところちも動けな  
いんだよ」

「へえ」

まあそうだろう。

いちいちそんなので動いていたら警察がいくつあっても足りない。

「いいか、何かあつたらすぐ言え。あと事が収まるまで無茶はすん  
な。半年前みたいに」

「…は、ははは」

まだ根に持たれてたのかな、困った困った。

「なあ、アスマルト」

「なんだ」シアンちゃんが今さらりと呼び捨てにしたが気にしていない。

長い付き合いだからなのか…っーか大胆すぎるだろ、年上を呼び捨てって。

「その人は自殺か？他殺か？」

辺りが静まり返った気がした。

アスマルトさんのシアンちゃんに対する配慮は意味がなかったと言  
うことか。

「一度でも狙われていたなら言う必要はあるな」

周りを注意ぶかく見回す。

咎められたら面倒なのだろう。

小さく単語を吐き出した。

「他殺、だ」

「他殺だ」

予想はしていた。

他殺だと、誰かに殺されたと。

「そうなんですか」

僕は僕で簡素で驚きもなくストンと事実を受け止めた。

死んだ人に同情するとか嘆くとか、僕はそんなことを出来ない。

いつそ彼女に代わり僕が死ねば良かったのに。

こんな、人の死にこれっぽっちも感情を動かせない奴なんか世の中に必要だろう。

だったら猫を心配して依頼したあの人のほうがまだ人間味があったはずだ。

「カルネ」

アスマルトさんがいささか厳しい目をしていて。

「大丈夫か？」

「え？僕は全然オツケーですよ」

「……まあ、ならいいが。あと全然の使い方違う」

おや。全然の使用を間違えたか。

「とりあえず、ここから帰れ。安全なところに」

「うん」

「はい、分かりました」

「カルネ、お前一人じゃないんだからな。危険なこととはとにかく避ける」

「……はい」

信用ないなあ、もう。

「　　にく」

事務所へ向かう途中。

沈黙を破るようにシアンちゃんが切り出す。

「人って、あっけなく死んじゃうもんなのか？」

「ん…まあね」

相手は小学生。

まだ道徳とかで死について話をされているのかは分からないけど、ここはマイルドに言葉選びをしなければ。

案外あっさり、人間は、生物は死ぬ。

例えば、首を絞められれば死ぬ。

例えば、高いところから落ちれば死ぬ。

例えば、刺さりどころが悪ければ死ぬ。

例えば、頭を撃たれば死ぬ。

例えば、毒を飲めば死ぬ。

「生き物はみんな脆いよ。脆くて、弱い。だからあっけなく死ぬ」

手持ちぶさたでなんとなくシアンちゃんの頭を撫でる。

ふわふわでつるつる。ほっそい髪の毛だな。

「そういうもんか」

「そういうもんだよ」

うーん、なんて言えばいいんだろうな、こついうとき。

気の効いた言葉はどれだけ探しても見つからない。語句の少なさに愕然とした。

これからはちゃんと国語の授業受けよう。今は古文だけど。

「そうか」

「うん、多分」

ナアーとヤマトが相づちを打つように鳴いた。

無言のままテクテクと歩く。歩く。歩く。

気まずいな。「にくは、さ」

「うん？」

「今まで何人、身近な人が亡くなった？」  
ふと食パンが浮かんだ。

「……………なんで、そんなことを」

「慣れていたから？」

シアンちゃん自身もよく分からないというように疑問符をつけた。  
慣れて…ああ、さっきアスマルトさんから他殺だ言われたときのこ  
とを言っているのだろうか。

「そりゃ、ねえ。僕は君より長く生きているから」

「違うんだ。こう、病死とかじゃなくて……………」

言おうか言つまいか渋っている。

怒らないから先を言っていると促すと、シアンちゃんは恐る恐る口を開  
いた。

「にくの身近な人が、殺されたとか」

どくと心臓がはね上がった。

…侮れないな、小学生の洞察力。

いやでも他殺言われて驚かないからそう思われても仕方ないか。  
半年前から思っていたけど、妙に賢くて鋭いな、この子。

理性が年齢と比例していないというのか。

「……………あることは、あるよ」

どうしょ。話すか話さないか。

でも半年も僕といてくれてるんだから、言うべきか。

「あんまり人には話さないで欲しいんだけど」

「約束する」

ニヤア。

「今までに三人、身近な人が死んだ」

「……………」

「そのうち一人は…追い詰められて自殺だけど、殺されたようなも

のだし」

身近な人じゃないならもう一人いるけど、それはいいか。あと殺されたじゃなくて殺したようなもの、だしな。

「…にもなかなか難儀な人生送ってたんだな」

「難儀って」

シアンちゃん本当に小学生か？難しい言葉使いすぎだろ。

「じゃあ私もちよつとしたヒストリーを話そう」

ヒストリーで。

表情から見るに明るいヒストリーじゃなさそう。

「…！」

「！」

シャー。

反応それぞれに危機を感じる。

反射的に後ろを振り向く。

バイクに乗ったフルフェイスヘルメットの人間がいた。

「にく、あいつのバイク数字の看板がついていない！」

ナンバープレートのことか。

確かにナンバープレートがない。意図的に外されているのか？「猫をよこせ」

「…またそういう展開ですか」

「嫌だと言ったら？私たちを轢くのか？」

「そしたらこのヤマト君は無事じゃないですね」

THE・人質ならぬ猫質。

「猫本体は必要ではない」

「え……？」

それはどういう意味だ？

まさか首輪に何かあるとか。

「渡さないなら殺してでも奪い取るまでだ！」

うわっ考えてる暇じゃなかった！

ヤバイ！ヤバイヤバイヤバイ！

何がヤバイってヤバイからヤバイ！

「きゃあっ!?!」

「行くよ!」

エンジンがかかりきる前にシアンちゃんWithヤマトをお姫様だっこして、逃げ出した。

全く洒落にならないリアル鬼ごっこ開幕。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0822z/>

---

僕のバイトは探偵です。

2011年12月11日19時47分発行